



俗通

渡邊義方編輯

日本小史

第四編

上



65

70

75

80

A557  
7

染崎延房檢閱  
渡邊文京採觚

梅堂國政畫

通 俗  
日本小史

東京書肆  
金松堂發兌

大約天下の治乱興廢成敗も遠く衰へ廢れたるも又興はる這ハ  
其人の無智短才と智慮英断ありと雖も一時運の然らむと  
且僥倖小因る物多しん既に清盛の熾ん朝權平族ふ歸りたるも  
其子宗成盛暗愚ふと木曾の山間ふ生立たる義仲の為ふ花洛と追れ頼朝  
伊豆の流人たりし由一回義旗と揚るふ及び一挙して義仲と伐ち尋て平  
家と西海ふ沈め天下ふ霸たるの大業と興せり介も僅三世ふと權と  
北條ふ奪はる是其時運と僥倖ある事此小冊と讀み果して其意味  
ありぬべし這ハ只軍事のありむ一身ふ至りて由又此時運と僥倖あり  
然と運ハ天ふあり難く僥倖ありと手と空しくあてぬらん  
一家とて興ふ成得し稚童ふ斯る策子とて身ふ引競へて讀めんと  
例のふ多し贅言とゆへ這半員の紙上と塞けり

明治十四年第十月

戲墨堂主人記



熊谷次郎直實

美矣艷矣青葉  
別有丈夫聞不堪



薩摩守平忠度



日本書紀卷之四十四

參河守源範賴



源範賴

日本書紀卷之四十四

上の巻 下の巻

屋島壇の浦の二役は平族悉く西海に亡び  
源氏一統の世となりて政權全く武門に歸せ  
其變遷と簡端に畧記す

頼朝が猜忌北條が奸悪義経終焉と全ふせむ  
高館は立つ烟と消え範頼も亦疑はる禍害と  
招く端緒と記す終る

通俗 日本小史第四編之上

東京 染崎延房檢閲 渡邊文京操觚

前編ふ全くと説き畢りつる 旭將軍木曾義仲ハ朝憲  
と憚るは己まが專横と極めしより 同族頼朝が指  
揮に従ふに院宣と奉卜て範頼義経大軍と以て追討  
の猛勢宛ら驅兎の如く後山蓋世の項羽と欺むく  
きしもふ強き義仲も錦旗に抗敵まゝくもろは宇  
治勢多の戦争敗れ其身も敢なく戦死し栗津の

露と消されど箇へ是同族牙と磨ぎ骨肉相食む乱離  
の世變恁る混雜と奇貨と一曩日西海へ走りたる平  
氏再々勢ひ盛んよ山陽道の將卒等多く服従るを  
そのうら未ぞ京師と襲ふよ暇なく要害の地と得ん  
りのと一旦敵も取らざるかの福原を回復し連戦  
頻りよ勝り乗り諸國小檄文と飛し或の説客を処々  
よ派出し豪族と説き兵と募り福原の地と根據と  
し軍旅よ長たる知盛が城と築きし結構へ背面小岷  
々たる嶮山と負ひ前面よ渺々たる青海原水や天

ある青一髪一の谷を西門とし生田と東の門と定め  
勝誇りたる猛兵十万余騎海よ大艦数千艘と繋ぎ  
以て水陸よ備へたる準備頗ぶる整々堂々いりふる  
鬼神天魔ありとて天翔ぶ鳥の羽翼なく水と潜るの  
鱒ふくば水陸俱よ當り難く撃べき隙も見えざりる  
加之ありば平氏の猛將能登守教経善く戦ひ兵を  
用ゆる手足のおとく進退能く其度よ適ひ備前安藝  
淡路和泉の諸國よ轉戦し源軍の部將義嗣義久等を  
撃殺し攻むれを必らむ取り戦へば必らむ勝つ平氏の

威関西は振ひ尋て京師へ攻入らんお企謀らうとの警  
聞疾くも鎌倉へ達せしう頼朝即ち二弟範頼義  
經ふ令を傳へ兵を率ゐて赴むた伐しむ先んむる時  
を人を制し後る時へ制せらる神速と貴とぶ軍の進  
退皇國無双の名將と美名を後の世に遺しし智あり  
勇らる義經へ範頼と俱ふ六萬騎を率ゐて一の谷へ  
と攻向ふ維時元暦元年二月七日まど明やらぬ朝霧  
の殺氣と含むで立昇る赤と白との主客の旗の手範  
頼へ軍監梶原平三景時と俱ふ五萬騎を以て東門へ向

ひ義經は一万騎を従へて西門を攻撃んと手筈と謀し  
合せし軍慮精妙き義經は彼方此方と敵城の虚实を  
篤と視察して忽ち得たる策畧と軍監土肥實平ふ  
授け一万の兵を分ちて七千騎を實平に授け以て西  
門へ向はしめ其身に僅う小精騎三千と率ゐて城後  
の間道鶴越より敵の背後を襲えんと山まゝ山の羊  
腸たる嶮岨き道と事とせし樹を伐りて數千丈の  
そまとも分ぬ溪澗ふ命らやうた丸木橋かけり渡る  
勇將猛卒とや黄昏ふたりしうを傾て山腹に屯在し

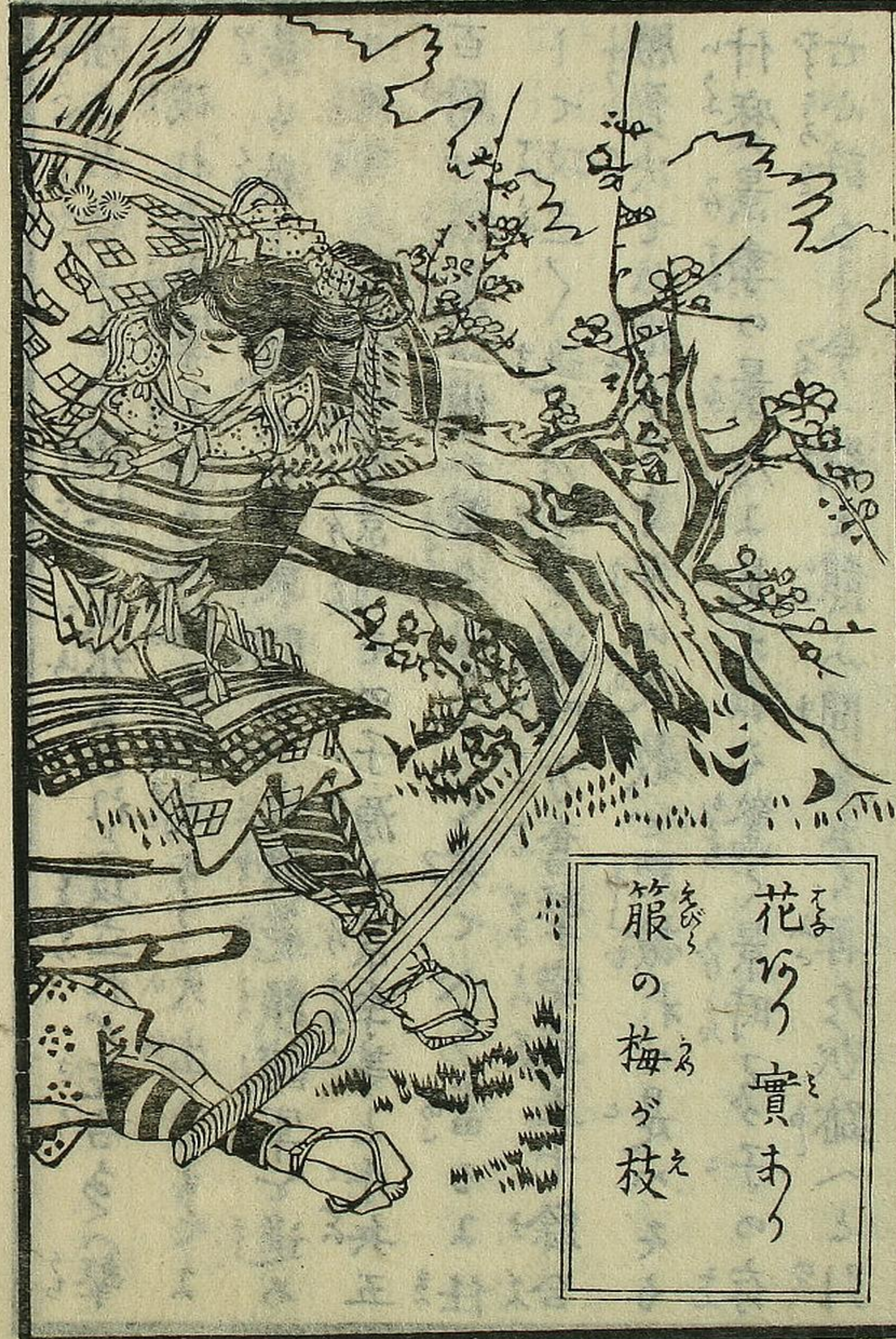
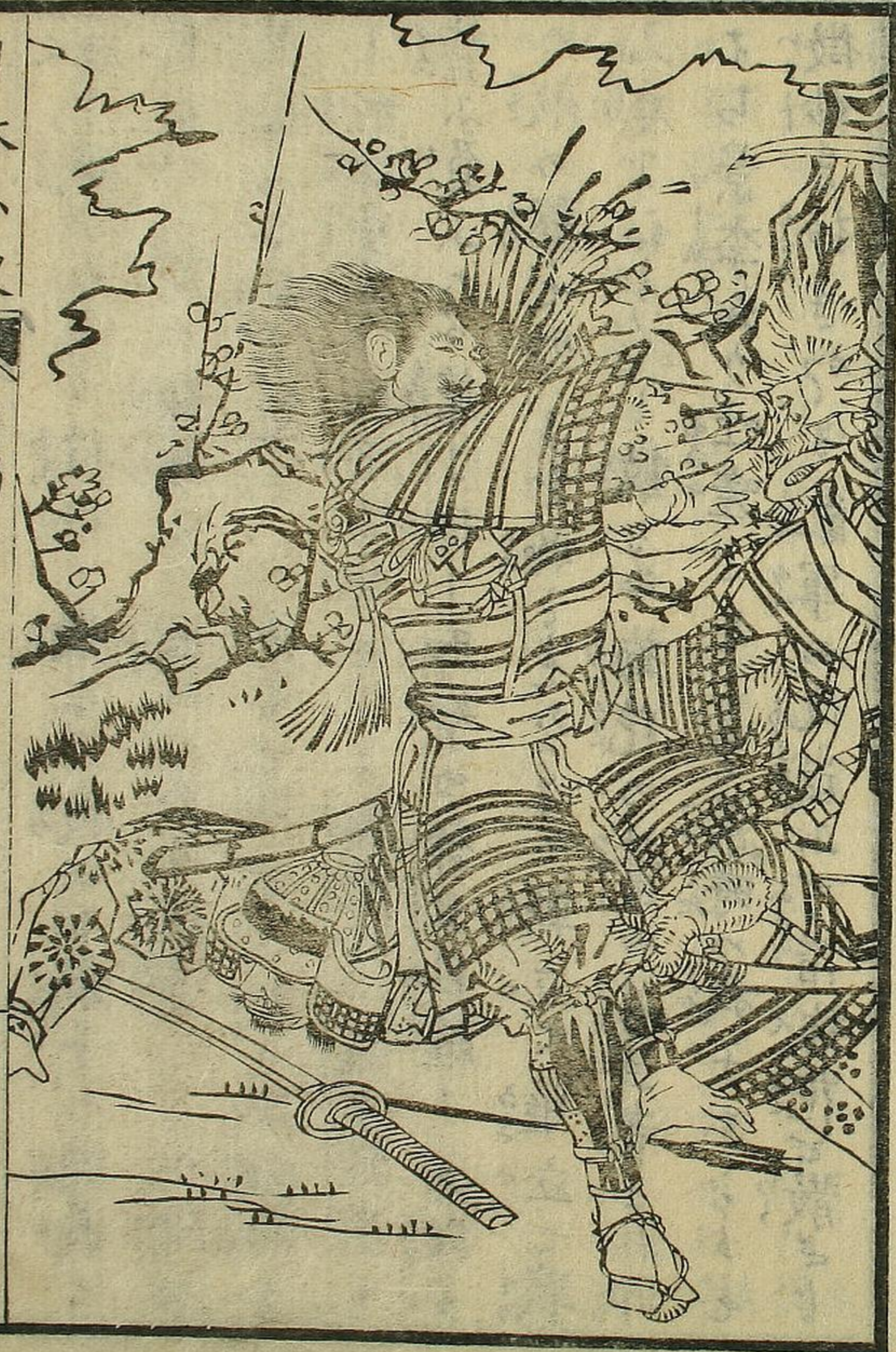
て暫く憩ふる中、小熊谷直實、平山季重、俱小義經の麾下に在り、相俱小話つて曰く、かゝる嶮岨、九十九折の山道と侵して進み行くと、孰も先孰れが後なるそ、此軍功の甲乙なくを、勞して功あるのみならず、唯徒らふ身体疲労を、戦争起りしそ、時又稀代の働き、覺束るけん、寧ろ此と退ぞ、たて大手の西門へ打向ひ、疾技、馳けの功と立ん、左のちる、や雨多りと、迭ふ點頭、く直實、季重さらば、行ん後る、如何で、足下、小後るべきと、前後と争ふ、勇士の應對、齊一、く馬又鞭打て、西門さ

して引返さ、春の夜いと、明ちく、馳つく頃、天も白と森と離る、小鳥の羽音と、俱なると、立つ沖の千鳥の、巖角、小當りて、散るや、玉霰、陸る、修羅の責鼓、吾も、夜光の壁と、なり、碎くる、覚期の声、勇ましく、関東武者の、随一人、熊谷直實、向ふたり、平山季重、此に在り、出遇ふ、敵の、ちる、や、門を開よと、呼む、ちたり、寐耳、水、の、平軍の、敵、押寄、まると、豫て、う、金、準備、いせ、う、今、た、僅、よ、兩人、が、百騎、よ、显、らぬ、手勢、と、以て、門、よ、薄、りて、戦争、を、挑む、傍若無人、の、自負、廣言、憎さ、も、憎、



と血氣の驕兵小敵と見て侮どるつ後の不覺の思ひ  
 もせを蹴殺し兵とんと城門の扉を左右に押開き出  
 でんとする後出しもやうに待設けたる直実季重太  
 刀引抜きて大喝一声馬を跳らし突入たり是はと驚  
 く敵兵の頭上は閃めく電光石火矢庭に四五人斬伏  
 つ必死の勇戦當るは前なるはよくと策めたるのみ  
 然れども敵は多勢と恃と押し入り込て撃んとは怒  
 る処に義經の別隊土肥實平と大將と一押し寄せ来り  
 一七千騎二人を撃たふ進めくと劇しき指揮し従ふ

強兵我後とど踏込く火水はなれと攻立れど左右より撃  
 も破れど兩軍互ひし入乱れ刀尖より火出るまで  
 最も激しく戦ふより東門へは大將範頼諸軍を進め  
 て攻向ふ軍監梶原景時その子源太景季等と手兵五  
 百騎と鶴翼不備へ横合よりと突て入り當るは任  
 して攻立く進まざる去る敵味方奮撃突戦五十餘合  
 勝負決せば退きて身方の人數と點檢れば是はそも  
 什麼景季の景だに見えぬを驚く景時こそ子の存  
 亡心許さし今一戦と懃ふ間もなく再び跡へと引



花<sup>はな</sup>の<sup>う</sup>実<sup>み</sup>あり  
 籠<sup>かご</sup>の<sup>う</sup>梅<sup>うめ</sup>が<sup>え</sup>枝<sup>え</sup>

返し戦ひるがう彼此と隈なく搜ゆる親子の情義と  
見よバ一個の猛雄らり兜へつゝの振落らん緑の  
黒髪ふら乱しあどりの糸も寸断くは甲の片袖断し  
形況勇ました名も芳をき梅花の一枝手折来て  
背ふ負ふたる箴は挿し即智の標目目醒しく夥多  
の敵の撃てかゝるを物ともなうを斬立て薙立て戦  
ふ度よゆらくと散るや梅花の蕾の若武者これ即  
ち景季なり吐嗟とをり景季時我子かゝるも  
微妙き拵きかゝる亂軍の仇嵐ふ可惜梅花と散さど

と問ゆる敵と突退け蹴退け辛くして景季と救ひ得  
て圍と突て出で憇ふ景季が當日の拵き感ぜぬ者  
もあらくは箴の梅の一美談芳をした名も今も朽む  
かの四郎高綱と宇治河原の先登争ひ鈍くは渠も欺  
むれしその失敗と償ふも足らんう是時又當つて  
平軍へ東西二門を破らんとと衆兵拳つて防ぎ戦ひ  
嶮岨と恃て義経が城背の方へ廻りしといふ夢もど  
も知る由なく鹿と逐ふ獵人の山を見むとの前の敵  
のみ防ぎ居たり既而又義経のいうで戦ひの期も合

えんと暗き山路の夜を侵し進み行くと數百歩遙ら  
 彼方ふ灯影の見ゆるへ人家とあを覺えなれ夫らあ  
 らぬりと計り各自あまよふかと得て近づいた見れば  
 茅が檐丸木の柱傾きて篋の床も座したるへ年八旬  
 をうらるるべし夫婦と覺しき老翁老媪圍爐裏よ  
 枯枝折ぐぐ焼く暖りて在る側ら小身の丈高く  
 眼清しく眉秀て肥太りいく偉大き一個の壯夫曲と  
 一獵矢と矯まぐらかの翁と語らふ形景と必ぞ獵  
 夫あふべし然らんよ山路の案内よく諳知たるる

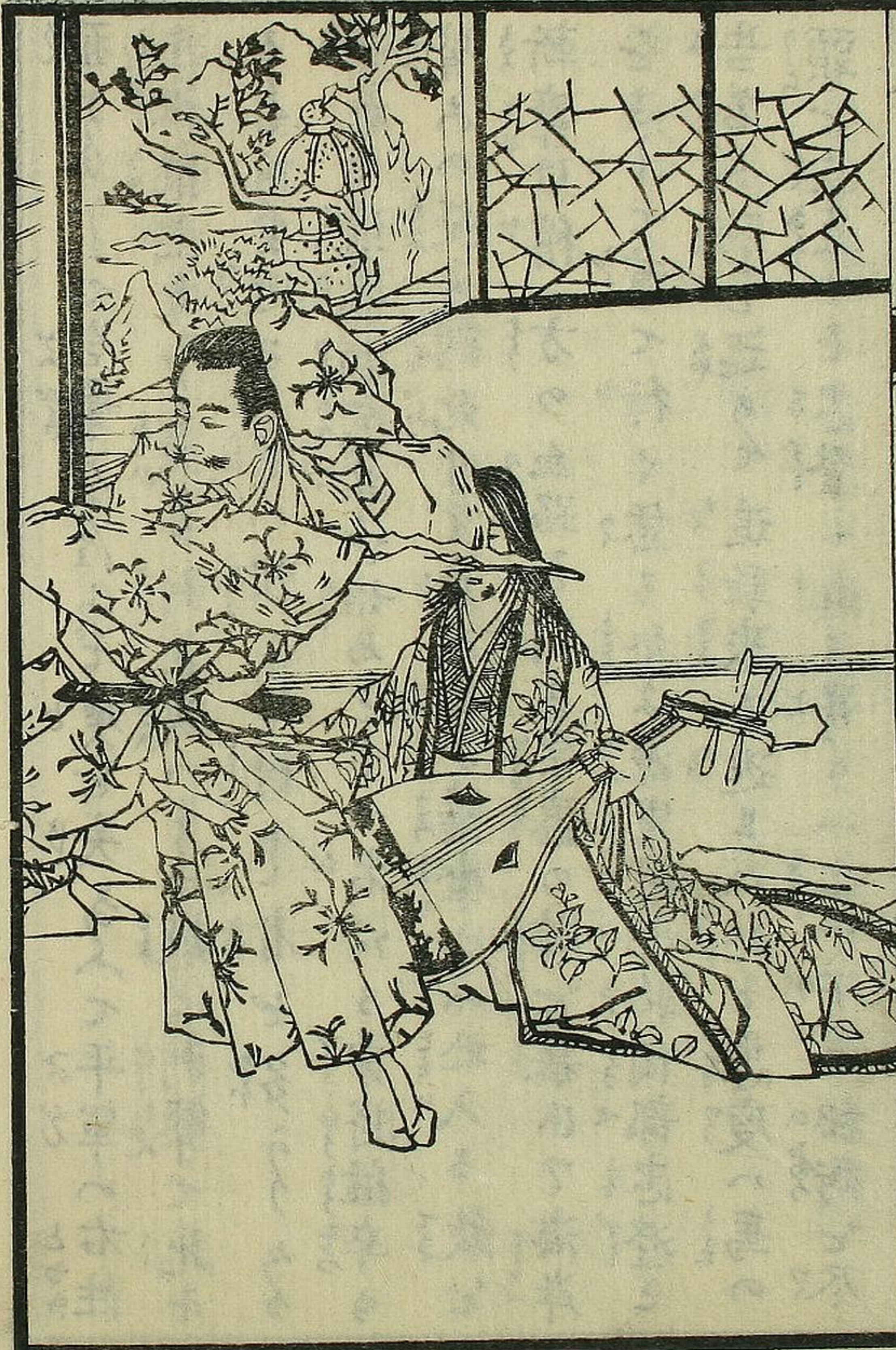
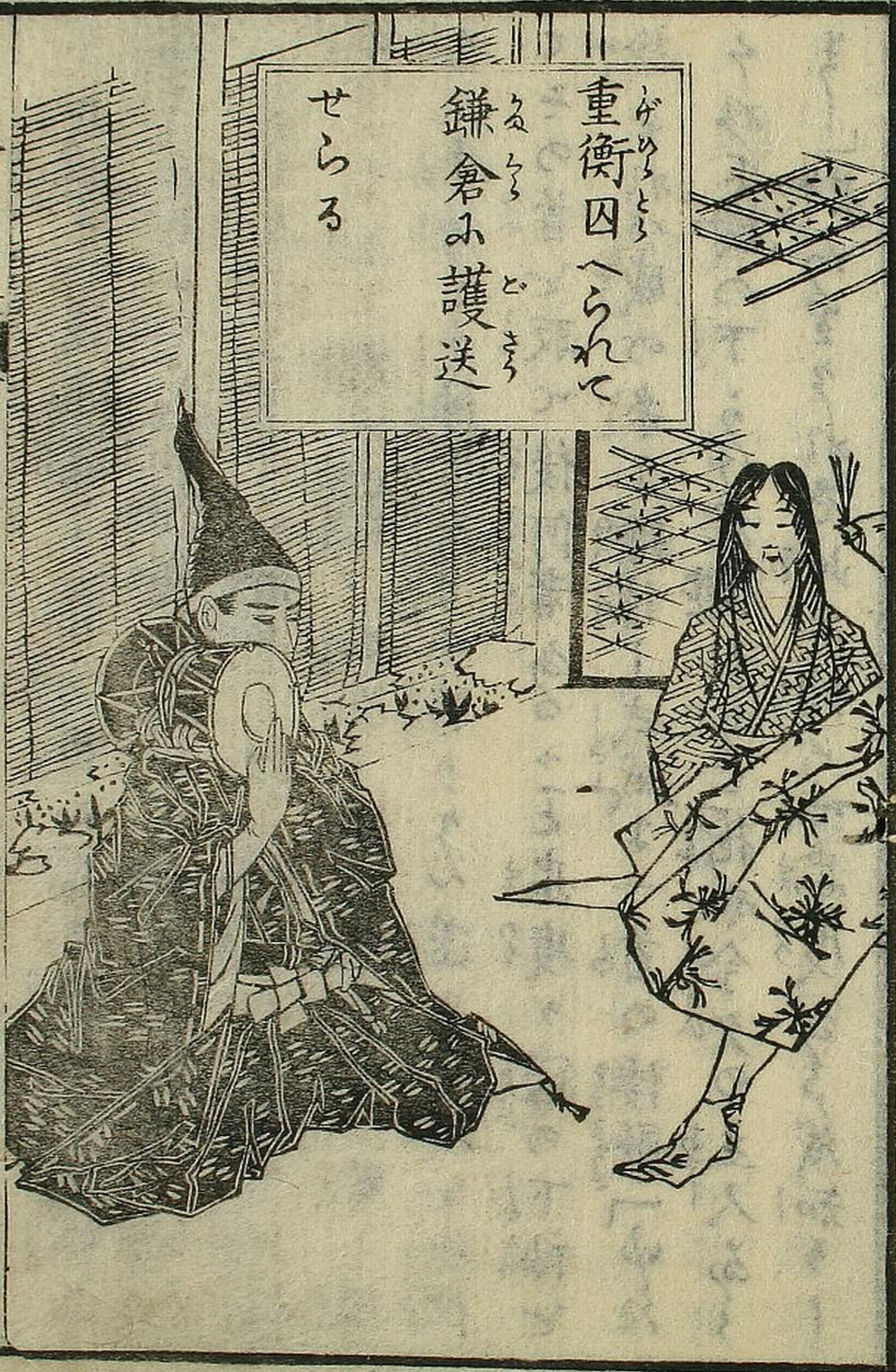
らん嚮導者よ最屈竟と辨慶として故と告げ且其  
 来歴如何と問ふ老翁答へてさん候らふ已し一年來  
 爰ふ棲る山獵をりて世業とまを鷲尾太郎と申を  
 者らて候らふあり問をせらる如く山路の案内委し  
 く知る候らふと今へちや老朽て其許等の役ふも  
 立がて一數なう糸ども此あふ一兒召俱しなまづ  
 幸ひあふんとりふよ喜ぶ義經主従その壯夫の齡  
 を問へを十七なりと答ふ義經乃ちち姓名と命けて  
 鷲尾次郎經春と呼び鎧伏と取らせ太刀と佩せ吾が

隊て加へへ不思議ふしぎの値遇ちぐよる者獲とつと勇いさと立ち  
 みの経春つねはる小導せうどうびうれ行ゆくあとも未いまと幾干いくせんあつと思おもひ  
 一ひとより一ひと道みち近ちかく鳥とりも超とぎる鴨越かぎこの絶頂つたてふ迄達ませし  
 頃ころ天あまもる既すでは明渡あかりりぬ俯ふして敵てきの城中しやうちゆうと見る目めもい  
 とと適あるる苔滑こけなめるふ雲蒸くもむして聳そびえ立たたる断巖せんがん絶壁つたへき駭おそ  
 然ぜんとして瞰み下くだせを屹きつ兮屹げ兮げその高たかきこと二十丈餘じゅうじゆう  
 その峻せんしきあと言いふべうううは義経よひつと経春つねはると顧くわとて能よ  
 く踰と也や金かねたや否いなやと問とふ経春つねはる曰いくよの峻山せんざんと踰と  
 ゆるものへ鹿しかりるのみ黒氏くろぢが飛ひ鳥とと借からざれば虚こ

空そらと翔とるべくもあらず魯般ろはんが雲梯うんはしたうれば眼がん下くだふ  
 下立くだりべくもあらず人馬にまいっせう超とるるんと義経よひつと聞き  
 つ冷笑れいしょうひ鹿しかも馬うまも四足しそくあらずや踰とゆるふ難たがきこと  
 やりるるまきと詞未しごと訖おらぬ内矢うちや叫こび太刀音たちね鯨波くじなみの声こゑ  
 手ても取るおとく聞きえつ耳みみと貫つぬく責鼓せぢ二門にもんの戦いくさひ  
 酣あままり義経よひつとまじく焦立しやくたつよの期きは合あむい何なんうせん  
 要えこそなると鞍くらあたるたる二頭にがしらの馬うまと牽ひ出し崖がけふ臨ぞ  
 ませ鞭むちと拳こぶしげ脣くちびるとあつと搏うちしう打うきて驚おどく二  
 頭がしらの鞍馬くらうま驀地倉もろぢくらふ墮お下くだり一ひとへ巖石がんせきふ觸ふて傷きずつた

一々下は達したる是もぞ勇む勇將義經我も續け  
と大鳴一声一鞭加へく乗下せば励まされたる三千  
騎續いり下る轉倒落し瞬く間ふ城後下下り立ち  
風ふ乗下て火と縦てを渦巻き上る猛火の勢ひ炎々  
として天と焦き烟りの下より總軍が動と拳たる鯨  
波の声是はそを如何ふと平氏の全軍支る術もあ  
らざるを天より降し地の湧り忽然として  
背後より現れ出たる稀代の策畧前後腹背敵と  
受け驚き潰ゆる跋巡足大手の方より範頼実平三

面よりして合撃なるはみど度と失ふて平軍の右往  
左往狼狽まはり或る討是或はま敵と刺撃て死を  
るも何れを逃る者へ僅らて討る者ぞ多かりける  
去れを通盛師盛等と始めとして名たる勇將猛卒も  
皆あつたの役は討死せしを爰ふま薩摩守へ込入る敵と  
斬靡け稍一方の血路を開き宗盛の跡と慕ひて海岸  
をさして落て行く憚る処は源軍の部將岡部忠澄と  
告名り駒を迅りて追駈来る逃はぬ処と忠度ハ馬の  
頭と立直せを忠澄も進も寄り一上一下と秘術と尽



一寄せて返一返一てへ又寄かたる迭の手練頓ふ  
勝負も見え分を撃物業へ面倒り疾ふれ組んと大手  
と廣げ馬上るぐろふ無手と組と拾合ふ機會は此彼  
齊しく互に鎧と踏外一兩馬が間は落重あり暫一揉  
合ふ手練と手練忠澄力や勝りらん遂に忠度と組伏  
てその首と取て後何者あるうと忠度が鎧の下袖と  
檢されバ威の糸は縫付一式紙は一首の倭歌「ゆた  
らねて樹の下うげ夜宿とせを花や今夕の主入あ  
ま」斯らるれを此は始め忠度あるは知り

とり初め平氏京師と棄て鎮西へ奔るの日忠度  
も其中ふ在り當時藤原俊成勅命と奉り和歌  
撰おと聞傳へ假令との身の朽るとも適れ死後の  
思ひ出ふ一首と遺一かうたやと狐川より馳返り  
夜俊成の家と訪ひ「ささみや志賀の都をりよふ  
一紙昔みづの山桜うま」とつ自咏と托して去る  
然るに俊成朝廷の忌諱と憚りて其姓名と載せ給忠  
度が風騷の名あれよ因てつよくちなく世上は高く  
顯るれ一とぞ間話休題宗盛へ帝及び神器と奉り



繫ぎ置たる兵船も移りて難と避く諸敗兵も舟を争ひ我先に乗らんとせど舟狭くして入るるに只徒らふ船舷を攀乗らんとすや我乗せしと太刀ひた括きて砍たらん腕を空しく舟に残り身体は海に溺れし朱に染るる海水は八大地獄ありといふ修羅の街の血の池もかくやとこころを無残の最期洩るる遣るあと後よりいとも烈しく迫り撃つ勝り乗りたる東兵も逐えて危うな平知盛父に代りてその子知章父と隔てあひ来る敵と遊り闘ふ必死の奮

戦前より進む敵兵とたゞ一盤斬斃し其場を去らむ戦死の吾子と救ふ術もあらず其間も知盛逸をやく道きて舟も上るを得たり子の死して父を救ひ父子と捨て走る心の中へ幾干や是非なる事と言はえよ断あとかく煩悩の羈繋がる恩愛節義一族互に目と目と注せ詞はなきて豁然たり是日直実の曉天を冒して西門に向ひ一時誰とも知らむ城上といと面白く憐れむを妙ある笛の一曲の啼がおとく訴ふるがおとく調正しく吹遊むぐる軍旅の陣中

日本小史 四編上 十六

は奥床おくどしくも勇いさまうき適あま愛あむた笛ふえの音ねやと鬼き  
神しんを欺あざむく直實ちかざみも漫まろみ起おこる感かん慨がいの腸もろと断たつ丈夫ぢゆうぶ  
の魂たまひかくて源軍げんぐん勝利しょうりを得えて落おち行く一個ひつりの若大將じやうだいしやう  
を擒とらへる見みまは是これぞまは無官むくわんの太夫たふ敦盛あつなりあり討うつ  
討うつ戦争せんじゆうの常つねとふりど可あ惜ままの貴介きけい公子こうしと  
撃うつあつとよと思おもへをいふ憐あまきさるも吾子わがこ(直家ちか)の  
あつとよ比ひ較かくべ無なる爺御やごが患うまひつららん縦たち遣やん  
と思おもへどもやせま公道こうどうと如何いうせん免とても角かくても君きみが  
薄運うすえんか覚期かくどわれと閃ひめりまの光ひかりりと諸もろともふ

頸くびかた斬きて涙なみだを揮ふるひその遺骸ゐがはを檢しらまれば腰こし挿さ  
む名笛なふえの里さとに備そなへ今朝けさ聞得きこし笛ふえもらの敦盛あつなりが遊あそぶ  
まのそと他たの憂うれへも身みの類たがひされ歎なげ息いきなりはと数あ  
回遺念くわいねんの笛ふえともらともよ其首級そのくびと義經よしきよに請こひ受け  
父經盛ちかざみに送りしとぞ去程さるほどに宗盛むねざきに宗族むねぞう千餘人せんじゆじんと  
海うみに航かうして讚岐さんきに走り豪族かうぞく田口成能たぐちなるの衆もろと依より  
八島やしまと以もつて行在あきざいとなは是これに於おて範頼のり義經よしきよ京師きやうしふ  
凱陣がいぢんして捷さを奏そうし擒とらふせし重衡じゆうかうと鎌倉かまくらに護送ごそう  
を頼朝よりちかその薄命うすめいと憐あれと狩野宗重かののむねしげに預あけ三度さんどの

膳部へ素より何不足なく訪ひ慰さる白柏子千手  
 伊王の両妓として側侍らりめ工藤祐経を相伴  
 役と酒と醜り厚く饗應しその憂憤を散せ  
 一む祐経鼓と槌ち千手が弾む琵琶の曲伊王を  
 傍ら爛酌し侍を酒酣し及び一あり重衡起て歌ひ  
 つ舞ふその謠曰く燭暗數行虞氏淚夜深四面楚  
 歌聲と姜里の述懐句外に溢生聞りの感動せざる  
 をたりその翌年六月奈良坂にて斬首せらる両妓之  
 を聞て悲歎止まば髪と削て尼あり厚く重衡が後

世と吊らひ其冥福を祈り一とを範頼義経軍功と以  
 て各々從五位下し叙せしれ範頼の参河守義経に左  
 衛門尉檢非違使に任ぜしは但し京師に在りて禁闕  
 の守護より九月頼朝平氏の建黨を誅滅せんと範頼と  
 西海軍事總督として義経をして南海の軍事を總括せ  
 しむ範頼三万騎を以て先づ癸卯山陽道より進撃すの  
 鋒尖銳とん長蛇の猛勢行盛と兒島小原田種員と葦  
 屋浦に戦ふて大に破るち破り海を渡りて豊後  
 に入る十月頼朝鎌倉に公文所を置き大江廣元を別

當として政令と出り又問注所と置き三好康信と執  
事として訟獄の事と司とす一む文治元年二月義経水  
路より平氏と討んと京師と発して渡部小幡沃十將  
帥五万の軍兵まで皆盡く出尽して陸を離れ水に就  
く海上遙不見且せを乗浮めたる千百の戦艦へ布儲  
けたる碁石のおとく天を掩ふ白旗へ六の浦風は閃  
めたる緑波も寄せり人老水に映ドて晃々と光り輝  
やく八千鋒の神代のむら一早蠅ふを魔軍降伏天  
やましくたる例もかくやくと負もしく思ふ衆心よ勇と

り全然れど東軍野戦は熟し水戦の進退如何を  
ねを送る危ぶむその中へ梶原景時策を建て曰く船  
の舳艦は皆櫓と設け進退去就は便あり一む是を号  
けて逆櫓とつみ水は熟ざる身方の為るは是と設く  
るよ如おとふ一此議のりのふと説誇る義経更み用  
ゆる色ふく進むを先として退くと後み是軍令の  
要領なりとむや去ると戦ひぬ未前より豫め退くと  
視る英氣と挫く身方の不吉嗚呼あるあはれと窘  
むれば景時勃然と怒りの面色心得がけたるその一言

進むべきを見て進み退くべきを察して退き機を臨  
 と變に應じ能く兵と用ゆるを良將とを謂べられ  
 彼と察せざれば知らざる進むあつて退くふくば匹夫  
 の勇將暴虎の采配野猪武者といふべきものと敦園  
 りく主張ふはと義経も色と變へ声のらげて景  
 時と疾視へ詰り床机と離れ猪の鹿の知らぬど  
 も吾の唯進んで敵は勝と知るのみ足下の文將と  
 らば千百の逆櫓と設るも足下の心は任まざり義  
 経の如きは逆櫓とやらん豎櫓とやらん嘗て用せる

処まゝ戦争に臨んで長會議無益の舌と敲らんより  
 進んで死にとまる者の義経は従ぐり退いて生んと  
 欲する者の速うよ去るべし如何あや如何ふと勇將  
 が励まゝ立る激しき軍令は武勇の名を得て坂東武  
 者畠山重忠熊谷直実佐々木高綱等と始めとて従  
 えんと請りの數百人將に纜と解んとするを海面  
 俄に沫立ちて暴風急に吹起り寄せり返を激浪怒  
 濤漂よみ兵艦と揺上げ揺下げりと凄しくも恐る  
 此時義経毫も騒がざるの暴風は怠りて敵必を油断

せん時の得えがごとく失うひ易まし如何いくも暴あるも順風あり疾とく纜ともと解とれどと令しを布ひけども船頭せんとう舵工かこう等ら假令かじ軍令ぐんしんなれむとていふでう憚おそる暴風ぼうふうを冒ありて出帆しゅつぱんするべきやと空嘯くうせうぶたて拵もちるを義経よひつねまほしく焦立あせたて言い甲斐がひあは奴輩やつらうる軍令ぐんしんを用もちひざる者ものの立地たちどちは斬きるて捨すんと刀やいばと撫あで起上たれバ伊勢いせ三郎ざぶらう義盛よしみ同どうトく弓ゆみは矢注やぶへく否いなと言いひ射殺せつころさんぞ勢いきりひ今更止いまさらやむと得えむ行ゆくも死しし止とまるも死しを身み方かたは誅ちゆうせらるゝんより敵てきは杭かつゝ死しまるゝ如ごとくと舵工かこう等らも爰こゝぞ必死ひつしの覚期かくど

浮うく沈しむる真帆まほ揚あげて白浪しろなみは鱗うろこる舵かの音声ねこゑ勇ゆうまゝを掉さの歌うた皆野干玉みなぬをまの夜よと侵おり元来もと五百艘いほひつうの兵艦へいかんも是こゝに至いたつゝ従したがふ者もの僅わずかは五艘ごさう總勢そうせい百五十餘ひゃくごじゅうご騎南きなんと指さく一瞬間いっしゅんその駛はきあと矢やの如ごとく三日餘さんじつごの海程うみぢやうを三時間さんじかんは經過きやうごて尼子浦あまのうらは達とちしある夜よはのぐと黎渡あふりり風かぜさく漸ややく治あまりぬ爰こゝまで船ふねを乗捨のりすてつ陸かま上のぼるとそが終しまり直ただま進すすんで勝浦城かつらうぢやうと拔ぬき敵將てきしやう田口良連たぐちらむらと擒とらまり其勢そのいきりは破竹やぶたけの如ごとく屋島やしまに至いたり火ひと高たか松まつの邑さとは放はなち僅少わずかの兵へいとハツはつは派はけ八方はちほうよりきて

日本小史 四編上

三十一

逆櫓の軍議  
義経の軍議  
景時を破る



金鼓と鳴り鯨波と揚つて押寄たり是れを驚く平軍  
の敵の大兵来りしと能くも認む敗走し再び先帝を  
奉りて海に泛び西國へ走らんとせしとど 範頼既し  
豊後より在り行ふ道なく歸るゝ家なく進退爰は谷り  
りて洋を回りて長門なる壇の浦へ碇泊せり是日の  
戦ひ最も劇しく義経が謀略合期して思ふが終は勝  
を獲し陸と水との源平両軍日も西山より春くとも軍  
を收めて相退きと見れば平軍の一船は長き竿と船  
先は押立て竿の先より日章の軍扇と開きしきふ

結び付け嬋妍窈窕たる一個の美人十二一重は緋の  
袴白ひあぶる黒髪は肩に懸るも妖嬈は春の柳の  
糸垂て人を招ぐふ彷彿る遠山の眉芙蓉の目毗巫山  
の神女が雲とありし夢の面影も恁やとむる粧ひ飾  
りて起上り源氏の軍と差招ぎいふ敵陣へ物まを  
さん送し宿陣の徒然なるま心を用ひて立たる的吾  
さき処を去の扇射落したまふ人やよ喃と谷の戸出る  
黄鸝の声も優しく呼掛たり其距離六九五歩をり  
至義経より見て左右と見顧りむし楚の養由基の



百歩の外は柳葉と穿ちきとりひ傳ふ吾朝戸田盾入  
の鐵の楯十枚のま至推累ねて射徹たり皆あは射  
藝の神あるものなれ夫れどよまを至らざると敵の  
指たる所の的を射落せしめりつるや誰みをお  
と早出よと傳ふる声の下よりして呼と應へて背後  
より駒と蹴立て一個の若武者下野の住人那須與一  
宗高と名告り弓箭手扱之徐々と海岸よあそひ乗  
出たり此時激浪船と動り沖風烈しく吹あはて  
の揺りた定まらば西軍俱は鎮まりて手は汗握り

目を注ぎの否いふと視詰て在り然まども宗高の  
左右みるくの彎も發さば射損ふを身方の耻辱弓矢  
八幡大菩薩首尾よく射さしめたまくと數回默禱  
み且く開たる眼をむけた宗高心と思ふやう日章  
を射るの易けれど我皇國の日本たり加之あはぞ一  
天萬乘至尊の御位を太陽よ比をそ儀射て落さば  
不敬の罪科要とをりよと鞍壺よ身を仰天よ翻へ  
弓と満月の如く彎固り矢声とけり丁と射る窟ひ  
違ふは的よ立たる扇の要と標帚と射切り扇の上

日本外史 日編上 七

より翻々と風のまふく空は閃めたる船の彼方より落止  
 まり箭の尚遙の沖合は羽音響りせ飛ゆく有様誰  
 一人感ぜざらむ思をばも声をうけ射たりや射たり  
 と源軍の箭と打ち平軍の船と扣き喝采の声鳴り止  
 まらば海は響ききて駭ごり此時ふ當つて平氏の全軍僅  
 小一万五千餘騎兵艦凡そ五百艘源軍海陸は充満て  
 兵艦合せて三千餘艘四面より来て攻む新中納  
 言知盛羅刀杖は船首は立ち諸將士は令して曰く勝  
 敗安危の決たれ今日の一戦は在り進んで死せんとす

退いて生るまうと心と一より力と戮せ義経の頭と獲  
 て止ん諸君必む勉めよやと四方を拂ふ威风凜然と  
 や歩々と攻来る東軍平將名代の景清教経死と決り  
 つ防ぎ戦ふ一以て千ふ當り志をく東軍を斬靡け稍  
 その勝に乗るものなり帝と兵船は徒らまわらせ兵  
 士と帝船は伏せ置て敵と誘ひかびた寄せ前後より  
 して夾撃せんと早速の軍旅も情あや頼一切たる身  
 方の部將かの田口成能ある者いつら源軍ふ款と通  
 らせまわらぐありと内應せしよりとの謀畧も合期せむ

義経乗輿の所在と聞知り短兵急し迫り撃つ早きは  
まてと二位の尼の前帝を抱き奉つて劍墮と扱いて  
そことも分ぬ千尋の海に身を跳らせて飛入つ骸も  
止めぬ白浪の跡なく消て失たまふ知盛以下七人皆  
海に投下て死を其餘行盛有盛等敵のまに討取て乱  
軍の中み戦死せり就中証登守教経へ驍勇無雙の猛  
将るといへ何で義経と死を決せんと群り蒐る敵兵と  
踏退け蹴返し進みゆく向ふに前ふた死物狂ひ義経  
の船に飛移り鎧の片袖無手と相る相らまて振きる

義経の身と跳らして飛鳥の如く七八艘のななる  
他船に飛乗たり逃さどもをを教経へ吾手は残り  
一鎧の袖とぬき捨つて逼り撃つを左へさせと  
源氏の力士三十人力を兼しとつて安藝家村ある者  
前より進み左右よりして二個の力士俱に三人相併  
びて無手とをうらまは組留る物々やと教経の前を  
る一個と蹴仆しつ二人を左右に擁きしむ無念と  
一敵此世の別路逆まは波間へ飛入たる勇士の最期  
ぞ勇しこれとは異ある宗盛清宗下たび海中に投せ

一うども<sup>あし</sup> 滔<sup>たう</sup>ぎて<sup>たう</sup> 遁<sup>たう</sup>る<sup>たう</sup> 波<sup>なみ</sup>の上<sup>うへ</sup> 忽<sup>たち</sup>ち<sup>ち</sup> 敵<sup>たか</sup>兵<sup>へい</sup>の<sup>の</sup> 熊<sup>くま</sup>手<sup>て</sup>よ  
 鈎<sup>かぎ</sup>りて<sup>りて</sup> 嗚<sup>な</sup>呼<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup> 虜<sup>ろ</sup>へ<sup>へ</sup>られ<sup>れ</sup> 死<sup>し</sup>耻<sup>ぢ</sup>晒<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup> 我<sup>われ</sup>の<sup>の</sup> な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup> べ  
 平<sup>へい</sup>族<sup>ぞく</sup>一<sup>いつ</sup>門<sup>もん</sup>の<sup>の</sup> 名<sup>な</sup>を<sup>を</sup> 汚<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup> 是<sup>ぜ</sup>非<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup> 多<sup>た</sup>る<sup>る</sup> 世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup> 有<sup>あ</sup>異<sup>い</sup>天<sup>てん</sup>變<sup>へん</sup>死<sup>し</sup>を<sup>を</sup>  
 辱<sup>ち</sup>た<sup>た</sup>時<sup>とき</sup>よ<sup>よ</sup> 死<sup>し</sup>せ<sup>せ</sup>ざ<sup>ざ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup> 死<sup>し</sup>し<sup>し</sup> 勝<sup>か</sup>る<sup>る</sup> 耻<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup> り<sup>り</sup>と<sup>と</sup> 古<sup>こ</sup>人<sup>じん</sup>も<sup>も</sup> 言<sup>い</sup>ひ  
 ろ<sup>ろ</sup>ん<sup>ん</sup> 宜<sup>あた</sup>る<sup>る</sup> 哉<sup>や</sup> そ<sup>そ</sup>も<sup>も</sup> 宗<sup>しゆ</sup>盛<sup>せい</sup>の<sup>の</sup> 清<sup>せい</sup>盛<sup>せい</sup>の<sup>の</sup> 實<sup>じつ</sup>の<sup>の</sup> 子<sup>こ</sup>よ<sup>よ</sup> り<sup>り</sup> ざ<sup>ざ</sup>る<sup>る</sup>  
 こと<sup>こと</sup> 事<sup>こと</sup>由<sup>よし</sup>あり<sup>あり</sup>。 次<sup>つぎ</sup>編<sup>へん</sup>よ<sup>よ</sup> 委<sup>あ</sup>く<sup>く</sup> 説<sup>せつ</sup>分<sup>ぶん</sup>べ<sup>べ</sup>

通 俗  
 日本小史四編之上終

010190512890

